

# 障がい者スポーツ競技における「感動」の原点を探って

小倉和夫

## はじめに

近年、パラリンピックをはじめとして、競技レベルの向上が目覚ましい障がい者スポーツについては、障がい者の活動として、その意義や感動を伝えるのではなく、あくまでスポーツとして、健常者の競技スポーツと同様な視点からこれを捉え、報道すべきであるとの考え方が定着しつつある。また、近年これと並び、障がい者がいかに「障がいを乗り越えた」かを、ある種の人間ドラマとして描いたり報じたりすることなどを「感動ポルノ」と呼び、障がい者が健常者に勇気や希望を与えるための道具として利用されてはいないかという批判もみられる<sup>1)</sup>。

そうした新しい視点に立つことの意義を考えるには、まず、「感動」とは、どのようなものであるのか、従来何が「感動」の原点になってきたかを見極める必要がある。こうした問題意識から、ここでは、パラリンピアンをはじめとした障がい者トップアスリート自身、あるいは、アスリートに密着したルポライターなどの当事者以外によって書かれた体験談、経験談を中心に「感動」の原点を探ってみることにした。

これらの体験談を分析するにあたり、障がいに対する障がい当事者のどのような態度や行為が、他人、ここでは特に健常者を「感動」させているのかという点を、周囲あるいは社会の視点から、あるいは「障がいの克服」へのプロセスと結果に着目して、次のように類型化してみた。第1の類型は、障がい当事者に焦点を当てたもので、これは、「1. 受容と忍耐」:(スポーツをはじめめるにあたってのいわば前提として)障がいを「客観的」に受容し、その状態に耐える努力を行ったこと、「2. 達成による克服」:スポーツなどを通じて「障がいを克服」したこと、あるいは何か社会的な認知を得る事柄を達成したことの2つにさらに細分化し得ると考えられる。尚、特定の障がいによって低下した身体機能を、他の機能の鋭敏化や深化によっていわば補填したり、あるいはその機能の転換を図る行為も、「障がいの克服」ないしある種の「達成」の一環とも考えられ

るが、以下の叙述では便宜上これを別扱いし、「3. 転換と補償」の名の下に別に列挙した。

第2の類型は、障がい者と周囲あるいは社会との関係に焦点を当てるもので、これは、「4. 抗議と糾弾」：スポーツ環境ばかりではなく一般の社会環境の不備あるいは社会の無理解、認識不足などに対する障がい者の抗議と糾弾、そうした不備や不足を続けてきた社会的背景に関する感情、「5. 謝意と共生」：周囲の人々の支援や配慮に対する障がい者の感謝の念、あるいはそういった周囲の人々の献身的努力そのものに対する「謝意」、さらには両者の緊密な関係である「共生」の二つに細分化されよう。

## 1. 受容と忍耐

障がい者トップアスリートの体験談からは、何よりも先ず、障がい者となった人々が「障がいを乗り越え」ていくための第一歩は、障がいを厳然たる事実として受け止め、そこから逃げたり、その事実を隠そうとすることから自由になることだったと読みとれる。

そこには、障がいを客観的に受容し、なぜ自分がこんな巡り合わせになるのかと悩み、苦悩することから「解放される」ための入口は、(後天的障がいの場合) 往々にして「(事故にも拘らず) 命が助かったこと自体に大きな意味があるはずだ」という考え方にある。「一度は奪われかけた命、より多くの人に役立つ道はどちらだろう？」と考える事は多い<sup>2)</sup>というチェアスキー金メダリスト大日方邦子の言葉は、まさに、この点を裏書きしている。車椅子陸上選手の廣道純も、同じ趣旨で次のように語っている。

もしおれが十五歳のあの事故で、死んでしまっていたら、ゼロだ。

でも命は助かった。

事故に遭う前のおれは一〇〇で、胸椎七番の下の機能を失ったことを五十とするなら、事故直後は確におれの人生は五十やったかもしれない。でもその後の生き方で、人生はいまや二〇〇や三〇〇にはなっていると思う<sup>3)</sup>。

やや似た形での障がいの受容について、視覚障がいマラソンランナーの道下美里は、中学時代入院した際に病院で知り合ったある中年男性の言葉に感銘したとして、その人の言葉を次のように引用している。

神様は乗り越えられる人にしか試練を与えない。自分は選ばれた人。お嬢ちゃん

も選ばれた人なんだよ<sup>4)</sup>。

しかし、得てして、そうした障がいの事実を「勇気をもって受容する」決意は、障がいの配偶者（車いすバスケットボール選手の京谷和幸の場合<sup>5)</sup>）や子ども（車椅子陸上選手の土田和歌子の場合<sup>6)</sup>）に対する考慮や感謝によって強まっていることが看取される。

また、こうした受容のひとつの形態として、障がいという事実を、克服すべき困難の対象とはみなさず、ひとつの特性ないし個性と考えることが挙げられる。例えば、数回にわたってパラリンピック大会に出場し水泳競技で金メダリストとなった河合純一は、「目が見えないということは、僕にとって、ハンディではない。すこしの不自由さはあるけれど、それは、個性の一つなのです」<sup>7)</sup>と語っている。クロスカントリースキーの金メダリスト新田佳浩も、合宿で車椅子を使用している同僚から、他の人たちと全く同じようにはできないかもしれないが、会社の面接で車椅子の者がいたら、記憶に残るであろうし、それは強みだと言われ、障がいも「発想を変えれば個性だ」と気づくのであった<sup>8)</sup>。また、そうした認識に真の意味で到達するための触媒としてのスポーツの重要性を指摘する声もある。例えば、脳性麻痺の陸上選手中嶋嘉津子は、「自分の持つ障がい、まさに自分自身の個性なんだって言い切れるようになったのは、私の場合、スポーツに出会ってからです」と語っている<sup>9)</sup>。

けれども、障がいを個性と認識し、個性であるが故にそれをはっきり表現することが、社会にどう受け止められるかには、問題もある。言い換えれば、障がいは個性であるという形での受容が、完全なものになるためには、見えない社会的「障がい」を乗り越えねばならぬという困難があり得ることに留意せねばなるまい。そのことを如実に表しているのは、アスリートとしての活動資金を得るために、セミヌード・カレンダーを売り出した義足の陸上選手中西麻耶のケースであろう。中西によれば、「同じパラリンピアンの声」も含め、「信じられないほど多くの人から投げつけられた『障がいを売り物にしがって』という罵声」があったという<sup>10)</sup>。

いずれにしても、障がい者であることを明確に「受容」することは、とりわけ、生来の障がい者ではなく、人生の途次で突然障がいを受けたものにとっては、簡単なプロセスではない。この点と関連して、パラリンピックといった障がい者スポーツ競技大会の持つ意味を考える際の重要なポイントは、そうした大会への参加条件が「障がい者」だという点である。自立精神で生き抜き、できるだけ「障がいを克服」しようとしてきた人からみると、「障がい者」の大会に自ら進んで出場することにためらいを覚えても不

思議ではない。自身もクロスカントリースキー選手であり、のちに監督となった荒井秀樹は、中学時代の新田をパラリンピックに出場させようと誘いかけた時、新田の父親から、息子をこれまで障がい者として育ててこなかった、今さら、障がい者の大会には出さないと、強固な反対にあったのである<sup>11)</sup>。そうした躊躇は、また別の次元でも起こりやすい。視覚障がい者でゴールボールの選手となった浦田理恵は、自分の目がどんどん悪くなることをできるだけ隠そうとし<sup>12)</sup>、また、ブラインドサッカー日本代表になった落合啓士は、「どうしても盲学校へは行きたくなかった。その根本には、自分が障がい者だと認めたくない強い気持ちが存在していたのです」と語っている<sup>13)</sup>。

## 2. 達成による克服

障がいから逃げず、それをいわば客観的に受容して自分を見つめることは、ある意味では、「障がいの克服」であると言えよう。なぜなら、客観的な受容は、多くの場合、自己を肉体的および精神的にはほぼ完全に「管理」できることを意味するからである。

こうした「自己管理」は、スポーツ選手の場合、とりわけ重要な意味を持つことが、廣道の言葉からも窺える。

おしっこは、我慢して止めておくことが出来ないから、自分で時間配分をコントロールして、トイレにゆきたいと思ったらすぐ行けるようにしておく。(中略)  
天井の電球の交換が難しい。ブレーカーが飛んだときもちょっと苦労した。傘で何度も突いてみたわ<sup>14)</sup>。

けれども、真の意味の克服とは、何かを達成したことによる充実感であるとも言える。多くのパラリンピアンの場合、それは、パラリンピック大会に出場することによって達成される。たとえば、サッカーJリーグでも活躍した車いすバスケットボール選手京谷は、友人の結婚披露宴でかつての仲間たちに会ったがゆえに、ある種の疎外感を感じた直後、次のように、自らに語りかけることによって、そうした疎外感を克服した。

「いや、待てよ。もしおれが、車いすバスケでパラリンピックという世界最高峰の舞台に立ち、日の丸を背負ってプレーすることができれば、こいつら（筆者注：Jリーグの選手やサッカー日本代表の選手）と同じ土俵にまた立てるのではないだろうか？ 競技が違って、日の丸を背負ってプレーすることはいっしょじゃないか？」<sup>15)</sup>

ここでは、パラリンピックに出場することが、(日の丸を背負うという意味で) ひとつの目標であり、「達成」のシンボルであることが暗示されている。ほぼ同じ思いは、肢体不自由の水泳選手成田真由美にもあったはずだ。成田は、海外に遠征して国際大会に出場するという夢を、アトランタ・パラリンピックへの出場という形で実現したが、そこには、6ヵ所のスイミングスクールで、車椅子が故に入会を断られた悔しさを乗り越え、克服したという達成感があった<sup>16)</sup>。

従って、パラリンピックでメダルを獲得することは、オリンピックと同じく、栄光や名声のシンボルであると同時に、パラリンピアンにとっては、「障がいを克服したという達成」のシンボルである。そして、障がい者にとってこの意味でのシンボルは、スポーツ大会のメダルに限らない。成田は高校受験合格をこう記している。

私は男女共学の県立高校を受験した。(中略) 無事に合格。(中略) ずっとあきらめていた学校生活を、自分の力で手に入れることができた<sup>17)</sup>。

そうしたシンボルは個人にとって克服のシンボルになるのみならず、社会にとっても「障がい克服」のシンボルとなり、そうした、個人の心理と社会の評価との相乗作用が、金メダル(とりわけパラリンピックのメダル)のシンボルとしての価値をより高めると言える。数々の国内、海外の選手権大会で優勝や準優勝を経験した、バドミントン選手の鈴木亜弥子が、引退後、5年を経た後に現役に復帰して東京大会に出場することを決めた大きな理由は、パラリンピック大会で金メダルを取りたいという強い熱意があったためという<sup>18)</sup>。

また、人によっては、健常者とともに練習したり、試合をすること自体が、「障がいの克服」のひとつのシンボルとなり得る場合がある。走り幅跳びなどパラリンピック大会の数種目でメダリストとなった、視覚障がいの陸上選手尾崎峰穂は、若い時代を回想して次のように語っている。ここには、「健常者と同じようなルールと場所で戦う」ことが「障がいの克服」のシンボルになるとする意気込みが込められていると言えよう。

いろいろ見学した結果、僕は柔道部に入学することにしました。柔道なら相手と組み合っただけで、あとは柔道の一般のルールとまったく同じです。どうせ運動をやるのなら障害者のスポーツではなく、いままで僕が見てきた一般のスポーツと同じルールやスタイルのスポーツをやりたいと思ったのです<sup>19)</sup>。

このように、特定の物や資格は、障がい者にとって、克服による達成のシンボルとな

るが故に、そうしたシンボルとなり得るものが、自分自身によって獲得されるのではなく、他人から「与えられた」ものとなると、同じようなものであってもその価値は著しく減少する。このことは、「障がいの克服」が個人と社会的レベルの双方の問題であることを暗示している。それは、例えば、下半身不随の女性が、カスタマイズされた車を運転し、銀行に勤め、パラリンピックのシッティングバレーに出場したケースからも窺い知ることができる。すなわち、カスタマイズ車の導入や銀行での雇用等は、いわば、社会が、「障がいの克服」に取り組んでいる証拠である。パラリンピック大会にまで出場できるのであるから、障がいはいはすべて社会的には克服されたように見える。けれども、この女性にも個人的「悩み」が残っていた。それは「足が小さいため子ども靴を履くしがなく、大人っぽいデザインの靴が履けないこと」であった<sup>20)</sup>。ここでは、「障がいの克服」は、個人的「達成感」だけで完全に成し遂げられるとは限らず、また、社会的配慮によってすべて達成し得るものでもないことが暗示されているといえよう。

### 3. 転換と補償

障がいをひとつの個性として見るという考え方は、特定の機能が障がいによって減少あるいは消失されたことを克服する過程で、他の特定の機能が特に発達し、失われた機能の補償、補完、あるいは機能の転換が行われ、それをひとつの克服なり達成として見るという考え方に通じるものである。

例えば、視覚障がい者が、聴覚による認識機能をとぎすますことによって、視覚機能を別の機能で補償する、あるいは、別の次元に転換することが例として挙げられよう。

目が見えない分、ぼくはひとつのことに集中することができるようになりました。それに（中略）目が見えなくなってから、それまで気がつかなかった友だちのやさしさ、両親や、弟のぬくもりを知ることができました。ぼくには、心のノートがあるから、見えなくともいいんです<sup>21)</sup>。

河合はこう言っているが、ここでは、視覚障がい者が、逆に集中力の高まりにつながり、また、周囲の人間の行動に対する感性の鋭敏化をもたらしたことが表されている。

こうした感性の鋭敏化について、道下は盲学校へ通い出した時の体験として、次のようなエピソードを紹介している。

いっしょに歩いていると、突然、「向こうから、三人歩いて来ますね」とかボ

ソツと言うんです。私には何も見えないんですが、しばらくすると本当に三人がやってきます。見えないはずなのに、どうしてわかったんだろうって。まさに藤山マジック！その種明かしを迫ると、足音でわかるんだとあっさり教えてくれました。

私がシャンプーを変えた時にも「シャンプー変えたでしょ」なんて当てられたり、貸したカセットテープを返してもらう時には、たくさんあるカセットテープの中から一本をひょいと出して渡してくれました。「どうしてわかったの！」と尋ねたら、私の匂いがついているからなんて言うんです<sup>22)</sup>。

また、道下はカナダのサマーキャンプに参加した際、全盲の少女がカメラで写真を撮っていることを知り、当人にその理由を尋ねると、自分には見えなくとも家族に見せることにより、家族の眼を通じて自分の体験を「見る」ことができるという趣旨の答えを得たという経験を語っているが、ここでは、健常者を通じてある種の感覚の転換が行われているとも言えよう<sup>23)</sup>。

こうした知覚や感性の転換は、ある種の障がい者スポーツにおいても行われていると考えることができる。例えば、ゴールボールやブラインドサッカーは、健常者もアイマスクを装着して競技し得るもので、いわゆるインクルーシブ・スポーツとして、健常者も障がい者も「共に」競技に参加することができる。こうしたスポーツは、「障がい」を前提条件として、それに対応したルールづくりをすることによって、新しい競技となっている。ここでは、障がいそのものについての「意味の転換」が起こりつつあるとも言える。

#### 4. 抗議と糾弾

「障がいの克服」にあたっては、障がい者トップアスリートのような活発な人であればあるほど、その過程で、自分と健常者を比較してフラストレーションを抱えがちである。そうした自らへの不満は、周囲への八つ当たりや抗議、糾弾の形をとることもしばしばである。言い換えれば、そうした糾弾や抗議は、「障がい克服」の過程のひとつの形と見ることもできる。

成田は、障がいを受けて入院中、見舞いに来た姉に「よく自分だけ友達と楽しく遊んでいられるよね」と皮肉を言い<sup>24)</sup>、母親には「どうして私なんか産んだの！」と当たり散らした<sup>25)</sup>。

パラリンピックで素晴らしい成績を上げた後でも、成田は、パラリンピックが開催されたアトランタと帰国後の日本を比較しながら次のように記している<sup>26)</sup>。

でも、これがもし日本だったらどうだろう。

「大丈夫ですか？お手伝いしましょう」

車椅子で動いてもなんの問題もない平坦な道でも、とんできて車椅子を押してくれる人がある。そうやって障害者を気にかけてくれること自体は悪いことではないけれど、「障害者」＝「助けてあげなくちゃいけない人」という考え方をするのは、やめてほしい。アトランタの子どもたちのように、なにが必要なのかということをしきりと見きわめ、そのうえで手を貸してくれることが、私たちにあってほんとうの意味での手助けなのだ。

一見当たり前のように聞こえるこの言葉は、ある種の間接的な批判であるとみることもできる。

ここでは、健常者を主流とする社会が障がい者の自立を奨励し、また障がい者自身が自立精神を持つようとしている一方において、障がい者を保護、介護すべき対象として常に位置づけるという社会的偽善が、批判の対象になっていると考えることができる。そして、そうした批判も、実は、「障がいの克服」の一形態とも言えよう。

抗議や糾弾の奥には、「障がいの克服」は、永遠の戦いであるとする見方が宿っているとみることもできる。

文学者であり、また障がい者運動家としても重要な役割を演じてきた横田弘は「社会のすべてが、障がい者と共生する時が来るとは私には考えられない。私たち障がい者が生きるということは、それ自体、たえることのない優生思想との闘いであり、健全者との闘いなのである」と述べている<sup>27)</sup>。

そうとすれば、個々の意識は別として、障がい者スポーツ、とりわけ競技スポーツは、こうした「闘い」をスポーツに昇華していく社会的触媒と見ることもできよう。

尚、障がい者に対する社会的差別やいじめが、障がい者側の抗議や糾弾という形をとらず、むしろ、くやしさをバネに得意な能力を伸ばす努力に結実するケースも無視できない。例えば、水泳選手の一ノ瀬メイは、幼少の頃、右前腕欠損を度々からかわれたことをバネとして得意の水泳に励み、「水泳があれば、だれにもなめられへんわ」と感じるようになったのであった<sup>28)</sup>。

## 5. 謝意と共生

「障がいの克服」は、得てして、周囲の激励や支援によって可能となり、又そうした支援に対する感謝の念やそこから生ずる報恩にも似た感情が、障がい者を鼓舞し、障がいの精神的克服につながる場合が少なくない。こうした激励や支援は、障がい者本人に、「障がいを克服」して何かを達成しようとする、ある種の使命感を与える結果となることもしばしばである。北京パラリンピックの車椅子陸上5,000メートル走に出場しながら、怪我のため途中棄権せざるをえなかった土田は、北京大会直前の心境について、次のよう語っている。

そんな私に手を差し伸べてくださったのが、夫の同僚や息子の保育園の先生、ママさん仲間たちでした。家事から育児まで、周囲の方々は、私のために貴重な時間を無償で提供してくれた。このサポートがあって競技を続けることができるのだという感謝の気持ちが、北京で好成績を収めなくてはいけない、という使命感へと変わっていったのです<sup>29)</sup>。

こうした「感謝の念から使命感への転化」という流れにもやや似た克服の形として、支援してくれる人々との一体感が「障がいの克服」と向上心につながるケースもしばしばである。例えば、大日方は、ボランティア活動で障がい者を支援してくれた人々との一体感の醸成について次のように語っている<sup>30)</sup>。

私は、単刀直入に疑問を投げかけてみた。

「自分のお金を使って来ているのに、どうして自分はあまり滑らないで、人の手伝いを一生懸命するの？」

ボランティアの一人は当然のように答えた。

「だって、仲間が滑れるようになったら楽しいじゃない？手伝っていて面白いし」

そんな当たり前のことをなぜ聞くんだだろう、と意外そうだった。

この一言で、自分がツアーに参加した人たちを「介助する人」と「介助される人」という二種類に分けて考えていることに気がついた。でもボランティアとして参加していた多くの人は、「スキーを楽しむ」という共通の目的で集まっている仲間なのだから、助け合うのは当然なことだと考えていたようだった。

支援し、「助けてくれる」人々と選手との一体感が選手を鼓舞する状況を、視覚障がいマラソンランナーの高橋勇市は「あしたのマラソンのためにがんばってきたんです。そのために、どれだけの人が助けてくれたか……。みんなのためにも、最後まで走りたいんです」<sup>31)</sup>と語っている。

同様に、健常者による支援と共生への熱意が、障がい者に跳ね返って「障がいの克服」と飛躍に役立つ過程を、京谷は次のように語る。

心が沈みかけたそのとき、「あれ、おれ、一人じゃないじゃん、陽子がいるじゃないか」と、改めて陽子の存在に気づいたのです。陽子が突然言い出した入籍の意味も、この時初めてわかりました。

ぼくが車いすの生活になるとわかっていながら、陽子は入籍をしてくれた。その時の陽子の覚悟、決意は並大抵なものではなかったと思います<sup>32)</sup>。

こうした共生の概念を、河合は次のようにまとめる。

すなわち「ぼくが満足できる泳ぎができたとき、ぼく以上によるこんでくれる人がいることに、いま気がついた」<sup>33)</sup>。このプロセスは、個々人の主観的な「共生」概念の理解を離れて、社会が共生概念に傾く過程につながるといえよう。

共生とは相互の「発見」と「変化」の過程であり、パラリンピックをいわば頂点とする障がい者スポーツは、多くの補助者やコーチ、家族や友人やボランティアの支援を必要としており、そうした支援は、支援をする方とされる方が共に「障がいを克服」していくプロセスであると言えるのではあるまいか。

障がい者スポーツの「感動」の原点を探りながら、その社会的意義の核心として、共生の理念を想定すると、「感動」は実は非日常性の要素をはらんでおり、他方、「共生」は、いわば、異質なものを日常化する理念でもあることに留意しなければなるまい。しばしば、障がい者同士が、障がいを「笑い話」の種にすることが見聞されるが<sup>34)</sup>、それは、一見健常者にとっては非日常を帯びる事柄や状態が、障がい者にとっては日常のことであることを暗示しており、こうした、障がい者にとっての障がいの日常性と健常者にとっての障がいの非日常性という「壁」を取り除く上で、障がい者スポーツの「感動」がどこまで、積極的、肯定的な社会的役割を演じ得るのか、あるいは、時として意図せざる否定的な効果を生むものなのかは、スポーツの在り方の問題と並んで、さらに検討されねばならない問題であろう。

## 参考引用文献

- 1) 日本放送協会 (NHK), 「バリバラ:【生放送】検証!『障害者×感動』の方程式」,  
<http://www6.nhk.or.jp/baribara/lineup/single.html?i=239>, (2018年6月11日).
- 2) 大日方邦子, 2006, 『壁なんて破れる』, 日本放送出版協会, 5.
- 3) 廣道純, 2004, 『どうせ、生きるならー車いすアスリートの明るい闘いー』, 実業之日本社,  
170.
- 4) 道下美里, 2015, 『いっしょに走ろう』, 芸術新聞社, 16.
- 5) 京谷和幸, 2011, 『車いすバスケットで夢を駆けろ』, 金の星社, 71-72.
- 6) 土田和歌子, 2012, 『今を受け入れ、今を越える。』, 徳間書店, 118.
- 7) 澤井希代治, 1997, 『夢をつなぐ』, ひくまの出版, 129.
- 8) 笹井恵理子, 2016, 『不可能とは、可能性だーパラリンピック金メダリスト新田佳浩の挑戦』,  
金の星社, 50-51.
- 9) 土方正志, 2001, 『ケンタウロス、走る』, 文藝春秋, 139.
- 10) 金子達仁, 2014, 『ラスト・ワン』, 日本実業出版社, 25.
- 11) 宮崎恵理, 2007, 『心眼で射止めた金メダル』, 新潮社, 36-37.
- 12) 竹内由美, 2013, 『見えないチカラとキセキ』, 学研教育出版.
- 13) 落合啓士, 2015, 『日本の10番背負いました』, 講談社, 32.
- 14) 廣道純, 前掲書, 56.
- 15) 京谷和幸, 前掲書, 104.
- 16) 成田真由美, 2001, 『前への前進』, 講談社, 110-111.
- 17) 同上, 56.
- 18) NPO 法人 STAND, 「挑戦者たち CHALLENGERS. TV これが障がい者スポーツだー二宮清純  
の視点ー」, <http://www.challengers.tv/seijun/2016/09/4672.html>,  
<http://www.challengers.tv/seijun/2016/09/4674.html>,  
<http://www.challengers.tv/seijun/2016/09/4780.html>,  
<http://www.challengers.tv/seijun/2016/09/4878.html>,  
<http://www.challengers.tv/seijun/2016/09/4888.html>, (2018年5月10日).
- 19) 尾崎峰穂, 2001, 『見えないから 見えること できること』, 衆芸社, 92.
- 20) 荒川陽子, 2002, 「くるま椅子の歌」, 花田春兆編『日本文学のなかの障害者像: 近・現代編』,  
231.
- 21) 澤井希代治, 前掲書, 66-67.
- 22) 道下美里, 前掲書, 45.
- 23) 同上, 55.
- 24) 成田真由美, 前掲書, 37.
- 25) 同上, 50.
- 26) 同上, 146.
- 27) 横田弘, 1979, 『障がい者殺しの思想』, JCA 出版, 90.
- 28) 金治直美, 2016, 『私が今日も、泳ぐ理由、一ノ瀬メイ』, 学研プラス, 31-32.
- 29) 土田和歌子, 前掲書, 22-23.
- 30) 大日方邦子, 前掲書, 82.
- 31) 池田まき子, 2008, 『夢をあきらめない 全盲のランナー・高橋勇市物語』, 岩崎書店, 13.
- 32) 京谷和幸, 前掲書, 71.
- 33) 澤井希代治, 前掲書, 136.
- 34) 尾崎峰穂, 前掲書, 95.

# In Search for Origins of “Inspiration” Emanating from Achievements of the Competitive Sports Activities of the Persons with Disability

Kazuo OGOURA

As the social recognition of the Paralympic Games becomes wider and the popularity of the Paralympians, particularly the medalists, grows rapidly, the severe training and human endeavor of the athletes as well as the devotion and support of their families and friends are more and more widely reported.

On the other hand, the touching human stories and inspiration which they give to the general public have begun to be seen as having an unintended negative impact to the actual social inclusion of persons with disability, as those stories and the mode in which they are reported, tend to make the medalists more and more divorced from the “ordinary citizens” with disabilities.

As part of the efforts to mitigate such a divorce and to fill the gap between the success stories of the elite athletes and the frustration of the masses, one could make some deep analysis on the nature of the inspiration or heightened sentiment which one draws from the achievements of the athletes with disabilities.

In doing so, the author of this article divides the origins of such “inspiration” or sentiment into five dimensions, namely (1) acceptance and endurance of disabilities, (2) overcoming disabilities by making achievements, (3) conversion of or compensation for disabilities, (4) protest and impeachment and (5) gratitude for support and sense of co-habitation or symbiosis.